

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究 (A)

研究期間：2005～2008

課題番号：17251015

研究課題名 (和文) ボルネオ島における「自然災害」の人文学的研究

研究課題名 (英文) Humanity Study on *Natural Disasters* in Borneo

研究代表者

津上 誠 (Tsugami Makoto)

東北学院大学・教養学部・准教授

研究者番号：10212052

研究成果の概要：

5名がボルネオ先住民社会を各々担当し、「自然災害」の受容の仕方を調査研究した。イバン社会で河岸浸食を調査した祖田は、その複合的要因を明らかにし、人々の語る因果論との齟齬を指摘した。クメナ川流域社会を調査した石川は、地域史にも目を向け、自然災害への可塑性を人々の生存戦略のあり方から説明した。カヤン人の移住時の災いを調査した津上は、森と精霊・死霊・人間の関連の仕方を明らかにし、災いは「自然」侵犯へのしっぺ返しなどではないことを示した。スクラン川の鉄砲水に関するイバン住民の言説を調査した内堀は、鉄砲水についての今日の説明のあり方を詳細に描き、また民族学的に有名なタブー侵犯と洪水との因果論が成り立たないことを示した。動物への不適切な扱いが雷雨や洪水を引き起こすというブナン人の言説と儀礼を調査した奥野は、その観念が人間/動物の対等・対称的な関係を維持していることを指摘した。最終年度には現地大学に成果を持ち寄り、内外研究者を交えたセミナーを開いた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2006年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2007年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
総計	16,500,000	4,950,000	21,450,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、宗教学、防災、自然災害、安全・安心

## 1. 研究開始当初の背景

本グループはボルネオ島において科研費調査研究を2000年度より4年間行い、人類普遍の世界観とされがちな「人為」と「自然」とがスタティックに対立する自然環境認識のあり方を批判的に再検討した。この問題関心を継承しつつ、「自然災害」の受け止め方に焦点をあてたのが、今回の研究である。

## 2. 研究の目的

ここで言う「自然災害」とは、近代的思考枠組みにおいて、少なくとも直接には「人為」ではなく「自然」自体のプロセスによって引き起こされると理解された災害を意味する。「自然災害」は「人為」的世界の外部から思いがけず襲ってくる力による災いという意味合いを強く持つ。この概念の成立背景には明らかに、「自然」と対峙しこれを制御する防災力ある社会構築を重要課題とする近代技術観と、それを作動させる近代国家の

枠組みがある。こうした国家体制の庇護の下にあってこそ、災害予測や防災一般に関する数々の科学技術も目覚ましく発展してきた。だが、そもそも人間にとっていかなる状態が「危険」なのかは、当該の時代と社会において共有されるものの見方・考え方からの規定を免れえず、今日の防災スペシャリストもまた、そうした文化的規定の及ぶ範囲の「危険」を排除しようとするという限界をもつ。

本研究は、ボルネオ島先住民諸社会の「自然災害」に関する認識のあり方を、現地における人類学的な参与観察とインタビューを通じて、実践と言説の両面で実証的に明らかにすることによって、近代社会で「自然災害」と一括りにされるはずの諸現象に関し、先住民各社会の人々がこれらの現象をいかなる個別的な因果関係によって了解し、いかなる固有の論理によって受容し、また対応してきたのかを解明することを目的とする。以下、5名の研究者別に方法と成果を記述する。

### 3. 研究の方法

(1) 祖田はトピックとしてサラワクにおいてこの30年ほどの間に急に進んだと見られる主要河川中流域の河岸浸食をとりあげ、自然科学的な原因解明を試みると同時に、住民へのインタビューを通じて、その弊害と原因とに関する認識を調べ、また住民がいかなる防災策を取っているかを調べた。主要河川のほぼ全てを訪れたが、特に集中的に調査を行ったのはラジャン川中流域である。

(2) 石川はサラワクの諸社会が自然災害に対して高度な可塑性を見せてきたと仮定した上で、クメナ川流域の華人、マレー人、イバン人、オランウル系の人々の全体を見渡しつつ、特に後2者における生存戦略を歴史的に描き出すという方法をとった。現地調査を繰り返したほか、当該地域の歴史資料としてとりわけサラワク・ガゼットを多用した。

(3) 津上は、「自然災害」概念の再検討のための一作業として、最近大規模なりロケーションを経験したばかりのバルイ川流域のカヤン人が、新天地への移住の際に起こる災いについて、どのような因果関係で説明し対応してきたのかを、調査した。

(4) 内堀は、大規模災害におけるようなグローバル化された自然災害言説とは異なる人々自身の語りを聞き検討する機会として、正に局地的自然災害と言える2000年初めのスクラン川中流部における鉄砲水に着目し、イバン人住民の言説を調査した。

(5) 奥野は、雷雨や大水などの自然の脅威が、雷神という超自然的存在によって引き起こされるという、東南アジア島嶼部諸地域の先住民社会の間に広がると報告される、自然災害をめぐる信仰実践に焦点をあてて、ブラガ川上流域の(元)狩猟民プナンの共同体お

よびその周辺の狩猟キャンプなどで調査研究を行った。

### 4. 研究成果

#### (1) 祖田

ラジャン川中流域における河岸浸食はさまざま。住民(主としてイバン人)によると浸食は1970年代から始まり、これまで20m~50mにも及ぶ河岸の後退となっている。川の流れが速くなっているとの指摘もある。村の前の果樹、畑、船着き場の損失はもちろんのこと、村自体が移動を余儀なくされるケースや、土地不足をきっかけとして住民間の不和がもたらされるケースもある。

河岸浸食の遠因として以下のことが指摘できる。村(ロングハウス)や学校用地の河岸浸食が目立つことから、人為的な植生撤去は一つの遠因に違いない。他方、中流域には上流域からのものと考えられる土砂の堆積が大量に見られ、これも河川幅を広げる遠因になっている。1970年代以降に上流域において急速に進んだ森林伐採が関係しているのだろう。浚渫(しゅんせつ)作業も遠因になっている可能性がある。では、浸食を実際に引き起こす、より直接的な原因としては、どのようなものがあるか。住民は誰もが高速船の波を指摘する。高水位時に確かにこれは原因となろう。高水位時の流木も浸食の直接原因となると思われる。他方、河川氾濫が引いた時にも浸食はひどいと住民は言うが、それが浸食の直接原因になることは言うまでもない。因みに、人々によれば河川氾濫の程度と頻度は増しているとのことである。もう一つ、住民の示唆からすれば、ひどい干ばつで河岸にひびが入った場所に水位が戻った際も、浸食は激化する。

高速船の導入時期が河岸浸食の開始時期と重なっているため、住民は浸食の原因を高速船に求めがちなのだが、上流域における森林伐採の本格化も同じ1970年代だったことには気づいていないことが多い。

以上の通り、サラワクの主要河川中流域住民は河岸浸食という新たな災害に晒されている。しかし、それへの対応策を講じている村はまれであり、講じているとしても抜本的とは言い難い。むしろ住民は政府その他からの援助をあてにしがちであり、その分、このような自然災害に対応する可塑性を失っているように見える。

#### (2) 石川

サラワク諸社会は太陽光と天水の豊かさからハイ・バイオマス(高生物量)な環境に置かれており、クメナ川流域社会もその例に漏れない。ここには下流からおよそ順に、華人、マレー人、イバン人、オランウル系の人々が棲み分けしている。19C後半から20C後半にかけての歴史資料を見る限り、この地域に

飢餓の記録がないことは、この社会の自然災害に対する高い可塑性を示唆している。ここではマレー人や華人との関わりにも注意しつつ、イバン人やオランウル系の生存の仕方に注目してみる。

歴史資料や住民へのインタビューから得られた19C以来のイバンやオランウルの生存の仕方は、蜜蝋、樟脳、サゴ、グッタベルカやジェルトンその他のゴム系樹脂、籐といった（非木材の）森林製品の採集と、そのマレー人や華人の商業ネットワークへの供給という面を抜きにしては語れない。しかも彼らは森林製品の出来や市場価格の浮沈を十分に意識して採集対象を変えるなど、極めて合理的な経済人として振舞っていた。1870年代から20C初頭にかけて森林産品はサラワク国の総輸出の3分の1を占めており、サラワク国政府もその振興に積極的だった。その後、20C前半のうちに産業ベースのシステムティックな森林伐採が福州系華人の主導で盛んになっていった。

イバンやオランウルは森林産品供給による貨幣経済への参加と焼畑陸稲耕作、そしていざというときの非常食（サゴなど）採集という3点の間を自由にシフトしながら生存してきたのである。彼らが定着的な換金作物栽培にコミットしなかったことも生存における可塑性と評価してよい。以上のような傾向は現金収入源が森林伐採関連の労働によるものに移行した現在についても言える。

生存に関する可塑性はサラワクの先住民に多かれ少なかれ言えることであり、移動性や出稼ぎを賞揚する文化、耕作外労働と焼畑耕作との両立可能性、そして定着的な換金作物栽培というストック型生存とは異なるフロー型生存、といった諸特徴で説明も可能だ。

### (3) 津上

バルイ川の焼畑耕作民カヤンは、新天地への移住を村単位で頻繁に行ってきた。最近も政府主導ではあるがアサップ地域に向けて大規模移住を行った。かつて人々は移住に際し、鳥や動物との出会いなど様々な事象による吉兆判断を盛んに行っていた。これらは60年程前の宗教改革や最近のキリスト教改宗によってほぼなくなったが、新天地が「良い」場所かどうかという関心は今でも強い。

移住時に人々が配慮する存在として、原生林に多く住むとされる精霊達がいる。アサップへの移住に際しても、人々は精霊達に何か贈与して立ち去って貰う趣旨の儀礼や、神に精霊達を追い出すよう頼む祈りを、行っていた。また、移住の決行後、ある村で頻繁に病気や事故死が続いたことについても、土地の精霊の仕業が疑われ、祈りがよく行われた。ここで重要なのは、これら精霊には「川の霊」といった名が与えられているが、名に冠せられる樹木名や景観要素（山や川など）は住み

場所を表しているに過ぎず、それらの精霊が木や山や川を表象しているわけではなく、ましてや「自然」を表しているとは言えない、という点である。

人々が新天地への移住で気にする存在には人間の死霊もいる。アサップへの移住後に頻発した不幸については、移住直前の死亡者たちを長年住んだ場所に正しい手続きで葬らなかつたからだという意見も強く、これに対処する儀礼や祈りが行われた。移住の際の死霊への配慮は、100年以上前に起こった大量殺戮の場に足を踏み入れざるを得ない場合にそこで儀礼を行うとか、大昔の墓地はもちろんのこと新旧の村跡地に対してもなるだけ触れぬようにするといった例からも、理解できる。原生林への移住に際してすら、その土地で死んだ者が想定されることがある。

カヤンの死霊の観念は、人は住んだり耕したりすると、その場所や土地に「人格」のようなものを残す、という考え方を基盤にしているようだ。移住元に魂が居残って病気になるという危惧や廃墟化したロングハウスへの恐怖もこれによって説明されるし、彼らの土地「所有」観もこれが基礎となっていると解釈できる。以上からすれば、カヤンが移住を繰り返してきた中央ボルネオは彼らにとり、人間の足跡があちらこちらに刻まれた高度に歴史的な世界なのだ。

カヤンは新天地への移住時に精霊だけでなく死霊にも注意を払う。また精霊は木や川とは別物である。つまり森林は、精霊と死霊そして人間が住む自明の環境なのであって、近代社会におけるように人間世界と対立する「自然」世界という意味合いはない。（そもそもその意味での「自然」を表す語はない。）だから、移住時の災害はカヤンにとり、侵犯された「自然」からの仕返しなどではない。

なお、子を作り土地財産を遺すというカヤンのありきたりの営みは、前述の「人格を残す」という観念を参照すれば、個人の死を受容させる営みとして、「自然災害」への可塑性の基盤を成すと解釈することもできる。

### (4) 内堀

スクラン川中流の鉄砲水では、13村のうち、大まかに言って上流方面の4村が床レベルを様々な程度に超えた増水を、下流方面の6村では床レベルにやはり様々な程度でせまる増水を、それぞれ見た。夜の鉄砲水だったのに人的被害が皆無だったのは、長雨ゆえに舟からの水掻き出しに出ていた村人が水位急上昇を見て、必要に応じた避難をしていたからだ。物的被害の方は、床上浸水がなかった村々も含めて様々に及び、総じて甚大だった。このような鉄砲水は前代未聞だったので防災の余地は小さく、それゆえ「人災」として語られることは殆どない。「天災」としての説明も、川の形状や建物立地などによって

極めて自然的合理的に為される。また、鉄砲水は元を辿れば森林伐採が関連することを彼らが知らないわけではないが、そのような人間側の要因も、自然論的に語られる鉄砲水の因果論には入ってきにくいのである。

ここで、島嶼部東南アジアに広くあった「近親相姦などのタブー侵犯が洪水をもたらす」という観念のイバン版である「クディ」について触れる。一応のところ、イバン人たちは近親相姦がクディに関係していると考えていると言ってよい。しかし、狩り取られた頭骨が生命力をもつため豊饒を生み出すという理解図式のなかの「生命力」という要素は研究者による発明である、と指摘したニーダムの所説は、クディを考察するのに示唆的である。これに照らせば、日常会話においてクディは近親相姦によって引き起こされたという因果理解は正しくない。クディは、近親相姦とその結果としての天候異変の双方を示している。その用法の延長線上に、近親相姦などの原因なしに、突風がクディと呼ばれることになる。言い換えれば、日常の語りにおいて、クディには原因や結果などはない。クディとは、因果の枠組みではなく、参照の枠組みなのだ。クディに関して、因果連関は、いったいどこに行ったのだろうか？

#### (5) 奥野

サラワクの(元)狩猟民であるプナンの現地調査研究を通じて、雷雨や大水といった彼らにとっての自然災害の発生が、動物に対する禁忌の侵犯に深く関わるものとして観念されていることに気づくようになった。

プナンにとって、そうした自然災害は常に、人間の動物に対する間違ったふるまいの結果だとされる。それらは、人間が動物をからかったり、さいなんだりしたために、雷神からの天罰として起きたと考えられている。そのため、動物をいじめたり、動物と戯れたりしてはいけないという強い禁忌がある。

(元)狩猟民プナンの動物に対する態度は、周囲の森林伐採が進められ、生態系だけでなく暮らしそのものが大きく変化した今日でも、ほとんど変わりが無い。プナンにとっての最大の脅威である雷雨や大水などの自然災害は、彼らにとって身近な存在である動物に対する態度のうちに捉えられるのである。

そのような動物をめぐるプナン人の禁忌の実践にはどんな意味があるのだろうか。農耕・牧畜という生業形態を発展させることによって、人間は動物に対して、生殺与奪の権利を次第に手に入れるようになった。そのようなヒト中心主義的な動物観は、今日、グローバル化による生物資源の世界的な需要の高まりともあいまって、地球上の各地で、人間と動物の間に、様々な現実的課題を生み出している。

そうした人間と動物の関係史の視点に照

らせば、自然災害をめぐる発動するプナン人の禁忌は、結果的に、プナン社会にある人間と動物の間の「対等な」/「対称的な」関係性を維持するように、あるいは、ヒト中心主義に陥ることがないように、働いていると捉えることができる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] 計(13)件

(1) 祖田亮次「マレーシア・サラワク州における環境改変と『環境問題』、『史林』92(1)、2009、pp.130-160、査読あり

(2) ISHIKAWA, Noboru: Centering Peripheries: Flows and Interfaces in Southeast Asia. Kyoto Working Papers on Area Studies (JSPS Global COE Program "In Search of Sustainable Humankind in Asia and Africa", Sub-Series No.8), Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, No.10, 2008, pp.1-13、査読なし

(3) ISHIKAWA, Noboru: State-Making and transnational Process: Transboundary Flows of Resources in a Borderland of Western Borneo, Transborder Environmental and Natural Resource Management (Wil de Jong ed.), CIAS Discussion Paper No.4, 2008, pp.117-128、査読なし

(4) 内堀基光「中等教育における文化人類学: 地歴科との関連に焦点を当てて」、日本学術会議『学術の動向』、2008年10月号、pp.36-39、査読なし

(5) 祖田亮次「東南アジアにおける都市-農村間移動再考のための視角-サラワク・イバンの事例から」『Journal GEO』Vol.3、No.1、2008、pp.1-17、査読あり

(6) Ishikawa, Noboru: Commodities at the Interstices: Transboundary Flows of Resources in Western Borneo, Asia-Pacific Forum No.36, 2007, pp.146-170、査読あり

(7) 奥野克巳「ペニス・ピン-サラワク・プナン社会における民主的な快樂」『国際学レビュー』No.19、2007、pp.87-112、査読なし

(8) Soda, Ryoji: Agents on the move: living strategy of indigenous people in Sarawak, Malaysia. The Annual Report on Cultural Science (北海道大学文学研究科紀要)119, 2007, 79-101、査読なし

(9) Soda, Ryoji: Mover-oriented approach to understand rural-urban interaction: a case from Sarawak, Malaysia. Journal of the Graduate School of Letters 2, 2007, 47-58、査読あり

(10) 津上誠「書評: 奥野克巳『精霊の

仕業」と「人の仕業」—ボルネオ島カリス社会における災い解釈と対処法』春風社2004  
『文化人類学』70巻4号、2006、561-564、  
査読なし

(11) 奥野克巳「近代医療を待ちながら：  
サラワクの辺境から眺める」『地域研究』7巻  
2号、2006、129-148、査読なし

(12) SODA, Ryoji: Iban city dwellers and  
rural property. Sarawak Development  
Journal 7-1, 2005, 38-47, 査読あり

(13) KENDAWANG, J. J., TANAKA, S., SODA,  
R., et al.: Difference of rice farming  
practices of the Iban in a national  
boundary area in Borneo and its  
socio-economic background. Tropics 4-4,  
2005, 295-307、査読あり

〔学会発表〕計(22)件

(1) Tsugami, Makoto: Study on  
Perceptions of Natural Disasters among  
Peoples of Sarawak: Opening Address on the  
Theme of the Seminar, Seminar on the  
Perceptions of Natural Disasters among the  
Peoples of Sarawak, 2009年3月24日,  
Universiti Malaysia Sarawak

(2) Tsugami, Makoto: Spirits and Ghosts:  
Two Factors of Misfortunes at the time of  
Migration among the Kayan. Seminar on the  
Perceptions of Natural Disasters among the  
Peoples of Sarawak, 2009年3月24日,  
Universiti Malaysia Sarawak

(3) Uchibori, Motomitsu: It's Not Really  
After the Deluge: Discourses on the Local  
Flood - Experiences in Ulu Skrang. Seminar  
on the Perceptions of Natural Disasters  
among the Peoples of Sarawak, 2009年3月  
24日, Universiti Malaysia Sarawak

(4) Ishikawa, Noboru: The Genesis of a  
Disaster Resilient Society: A Historical  
Analysis. Seminar on the Perceptions of  
Natural Disasters among the Peoples of  
Sarawak, 2009年3月24日, Universiti  
Malaysia Sarawak

(5) Okuno, Katsumi: Natural Disaster  
Among the Penan: Beyond "Thunder Complex".  
Seminar on the Perceptions of Natural  
Disasters among the Peoples of Sarawak,  
2009年3月24日, Universiti Malaysia  
Sarawak

(6) Soda, Ryoji and Kazuhiro Yuhora: Bank  
Erosion in the Middle Basin of the Rejang  
River in Sarawak, Malaysia. Seminar on the  
Perceptions of Natural Disasters among the  
Peoples of Sarawak, 2009年3月24日,  
Universiti Malaysia Sarawak

(7) Ishikawa, Noboru: Biomass Society in  
the Tropics: Genesis and Metamorphoses.

Session 2: Forest metabolism - Changing  
Nature of Biomass in Humansphere, 1st  
International Conference, In Search of  
Sustainable Humansphere in Asia, 2009  
年3月8日~11日、Inamori Memorial Hall,  
Kyoto University

(8) 奥野克巳「今日の宗教起源論とその意  
義」、桜美林大学・国際学研究所主催公開シ  
ンポジウム「キリスト教と人類学」、2009年  
1月28日、桜美林大学

(9) 石川登「東マレーシア北部流域社会に  
おける『仕事』の諸相：マレーシア、サラワ  
ク州のイバンならびにシハン社会から」、分  
科会『仕事の人類学』が拓く地平—労働・  
ジェンダー・社会変容—』文化人類学学会第  
42回大会、2008年6月1日、京都大学

(10) 奥野克巳「倫理の起源～サラワク・  
プナン社会における人間、雷神、動物～」文  
化人類学会第42回研究大会、2008年5月30  
日~31日、京都大学

(11) 奥野克巳「医療人類学の原液」文化  
人類学会第42回研究大会・分科会「医療人  
類学を学ぶこと/教えること」、2008年5月  
30日~31日、京都大学

(12) Okuno, Katsumi: Men, Thunder God,  
Animals among the Western Penan of Belaga,  
Sarawak. 9th Borneo Research Council  
International Conference 2008, 2008年7  
月29日~31日, Universiti Malaysia Sabah

(13) Okuno, Katsumi: Fear of the  
Thunder God's Anger: Men and Animals  
among the Penan of Sarawak. Workshop on  
Cultural-and Environmental Co-existence  
in Sabah and its Neighboring Areas: Nature  
and Culture in Borneo, 2008年10月9日,  
ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

(14) 奥野克巳「ボルネオ島のプナン社会  
における人間と動物」科研費研究「人間と動  
物をめぐる比較民族誌研究」第1回研究会、  
2008年12月7日、桜美林大学

(15) 奥野克巳「狩猟民プナン、非在の民  
族誌点描」第2回南九州人類学研究会、2008  
年12月13日、宮崎公立大学

(16) 祖田亮次「マレーシア・サラワク州  
におけるプランテーションの拡大と先住民  
社会」日本地理学会2008年秋季学術大会、  
2008年10月5日、岩手大学

(17) Ishikawa, Noboru: Biomass Society  
in the Tropics: Genesis and Metamorphoses.  
Session 2: Forest metabolism - Changing  
Nature of Biomass in Humansphere,  
International Workshop, In Search of  
Sustainable Humansphere in Asia and  
Africa, 2008年3月12日~14日, 京都大学

(18) Okuno, Katsumi: Penis  
pin-Democratic Pleasure among the Penan of  
Sarawak--. International Workshop on

Cultural Diversity in Sabah and Neighboring Areas, 2008年3月6日, Sabah Museum, Kota Kinabalu, Malaysia

(19) 津上誠「ボルネオにおける『家』: カヤンとイバンを中心に」国立民族学博物館共同研究会『『家』の人類学』、2007年10月20日、国立民族学博物館

(20) Ishikawa, Noboru: Commodifying Bornean Forest: From Jungle Produce to Agro-industry in the Kemena Basin, Northern Sarawak. Canadian Council of Southeast Asian Studies (CCSEAS) Biennial Conference, Beyond Intellectual and Political Boundaries: Southeast Asian Studies in the 21st Century, 2007年10月19日, University of Laval, Quebec City, Canada

(21) Ishikawa, Noboru: Beyond Hills/Plains Binary: New Approaches to Spatial Ecology of Southeast Asia. Workshop "Revisiting the 'Frontier' in the Southeast Asian Massif", 2007年12月12日~13日, National University of Singapore

(22) 祖田亮次「サラワクの森林開発と先住民社会」第17回日本熱帯生態学会・公開シンポジウム、2007年6月17日、高知城ホール

[図書] 計(14)件

(1) ISHIKAWA, Noboru: Between Frontiers: Nation and Identity in a Southeast Asian Borderland. National University of Singapore/NIAS Press/Ohio University Press, 2009(in press).

(2) 奥野克巳・椎野若菜・竹ノ下祐二(共編)『セックスの人類学』、春風社、2009、321p

(3) 奥野克巳「セックスと性具: プナンのペニス・ピン」、奥野克巳・椎野若菜・竹ノ下祐二共編『セックスの人類学』春風社2009、28p

(4) 津上誠「マイホーム」日本文化人類学会編『文化人類学事典』、丸善、2009、2p

(5) ISHIKAWA, Noboru: Cultural Geography of the Sarawak Malays: a View from the Margins of the National Terrain. Zawawi Ibrahim [ed.], Representation, Identity and Multiculturalism in Sarawak. Kajang: Persatuan Sains Social Malaysia, 2008, 18p

(6) 石川登『境界の社会史 --- 国家が所有を宣言するとき』京都大学学術出版会、2008、360p

(7) 祖田亮次「サラワクにおけるプランテーションの拡大」、秋道智彌・市川昌広編『東南アジアの森に何が起きているか』人文書院、2008、29p

(8) 内堀基光(編著)『資源と人間』(論集:

資源人類学01)、弘文堂、2007、384p

(9) 内堀基光『『リニアな空間』: イバンの行動環境における線形表象に向けての序説』、河合香吏編『生きる場の人類学: 土地と自然の認識・実践・表象過程』京都大学学術出版会、2007、22P

(10) Soda, Ryoji: People on the move: rural-urban interactions in Sarawak. Kyoto University Press and Trans Pacific Press, 2007, 253p

(11) 石川登「マイクロ・トランスナショナルリズム: ボルネオ島西部国境の村落社会誌」杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会: ミクロロジーのアプローチ』、NTT出版、2006、19p

(12) 内堀基光「社会空間としてのロングハウス: イバンの居住空間とその変化」、西井凉子ほか(編)『社会空間の人類学: マテリアリティ・主体・モダニティ』、世界思想社2006、24p

(13) 奥野克巳『帝国医療と人類学』春秋社、2006、229p

(14) ISHIKAWA, Noboru, ABINALES, P.N. and TANABE A.: Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa. Kyoto University Press, 2005, 289p

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

津上 誠 (TSUGAMI MAKOTO)  
東北学院大学・教養学部・准教授  
研究者番号: 10212052

### (2) 研究分担者

内堀 基光 (UCHIBORI MOTOMITSU)  
放送大学・教養学部・教授  
研究者番号: 30126726  
石川 登 (ISHIKAWA NOBORU)  
京都大学・東南アジア研究所・准教授  
研究者番号: 50273503  
奥野 克巳 (OKUNO KATSUMI)  
桜美林大学・リベラルアーツ学群・教授  
研究者番号: 50311246  
祖田 亮次 (SODA RYOJI)  
北海道大学・大学院文学研究科・准教授  
研究者番号: 30325138

### (3) 連携研究者

ジャイル・ラングブ (JAYL LANGUB)  
マレーシア・サラワク大学・東アジア研究所・上級研究員